

第56回 経済・財政一体改革推進委員会
第23回 EBPMアドバイザーボード
議事要旨

(開催要領)

1. 開催日時: 2025年12月15日(月)16:15～18:00
2. 場 所: 現地開催(オンライン併用)
3. 出席委員等

会長	若田部 昌澄	早稲田大学政治経済学術院教授
会長代理	永濱 利廣	株式会社第一生命経済研究所首席エコノミスト
委員	滝澤 美帆	学習院大学経済学部教授
同	土居 丈朗	慶應義塾大学経済学部教授
同	中室 牧子	慶應義塾大学総合政策学部教授
同	西内 啓	株式会社ソウジョウデータ代表取締役
同	横山 泉	一橋大学経済学研究科教授
オブザーバー	赤井 厚雄	株式会社ナウキャスト取締役会長
同	浦田 真由	名古屋大学大学院情報学研究科准教授
同	小西 葉子	筑波大学システム情報系教授 / RIETI上席研究員(特任)
同	古井 祐司	東京大学未来ビジョン研究センター特任教授
同	松田 晋哉	福岡国際医療福祉大学教授
	岩田 和親	内閣府副大臣

(議事次第)

1. 開 会
2. 議 事
 - (1)防衛生産・GX投資・半導体投資等について
 - (2)EBPMアクションプラン改訂案について
 - (3)改革実行プログラム改訂案について
 - (4)進捗・管理・点検評価表改訂案について
3. 閉 会

(配布資料)

資料1 EBPMアクションプラン2025(原案)(会議限り、後日公表)

資料2 改革実行プログラム2025(原案)(会議限り、後日公表)

資料3 進捗・管理・点検評価表2025(改訂版)(原案)(会議限り、後日公表)

——第23回EBPMアドバイザリーボード——

(概要)

○議事(1)について事務局から説明を行った。

○委員等からの主な意見は以下のとおり。

- 進捗管理・点検・評価表に関して、半導体政策と同様に、CO₂削減目標も大きな政策目標への寄与を明確化する必要がある。2030年度の温室効果ガス46%削減は、最終的に経済成長と結び付けることが目的だが、経産省単独で取り組むには限界がある。製造業や家計部門の指標も取り込んだのは非常に良いと思うが、ネットの数値で見た場合のCO₂削減目標の達成状況が本質的には重要であり、他省庁の政策との連携が重要である。長期的には、林野庁による所有者不明林野のデータ整備などの政策とも繋がる政策になってくると思う。次年度の課題は、経産省の枠を超え、目標達成に必要な範囲をどこまで統合的に把握し、政策をグリップするかである。(赤井委員)
- 何十億円の規模の防衛市場を作る目標に対して、アウトプットはある程度距離のある指標を置かざるをえないところがあると思うが、定性的に済ませるのではなく、防衛産業参入促進展等のイベント回数という客観的な数値で測れる指標を置いたことを評価する。徐々に取り組むにつれてKGIとの距離がより近い指標を置くことができれば望ましい。(小西委員)
- GXにおいては家計部門の指標が少ないため、今後、経済産業省の省エネ化で家計部門に関する取組の指標は入れていただきたい。家計部門の電力消費も15%程度あり、割合が大きい。(小西委員)
- 半導体について、おそらく日銀のDI(景気動向指数)の活用は難しい。製造業という中分類はあるが、精密機械かつ半導体という分類は無いためである。文部科学省と協力し、この分野に就職する人がどれほどいるか、というデータが取れるとよい。(小西委員)
- 半導体分野が顕著だが、論点を出したものの実際にはデータが取れないこともあると思う。半導体に限らず全体的に、今後新たな社会問題が出てくる度に、それを

測定するためのデータが足りないという壁にぶつかりうる。そうした際の調査設計等でも委員に迅速にご相談いただきたい。(西内委員)

- 前回のアドバイザリーボードで、研究開発の支援の効果推定に関して一般的なコメントをさせていただいた。一般的には、科研費のようなことも含め、様々な文脈で支援を受けたプロジェクトの対象者に支援後の成果を報告してもらって、その成果報告を基に評価がなされているような場面が多くあると理解している。しかし、それではこのアドバイザリーボードで目指すような因果関係を捉えた効果の推定や評価にはならないということを再度別の言い方でリフレーズさせていただく。

まず、支援を受けた前後の比較を、支援を受けた企業やグループ内のみでしてしまうと、支援なしでも成し遂げられていた仮想現実の売上高、つまり、カウンターファクチュアルの情報がないため、カウンターファクチュアルと実際の生産高の値との差という実際の因果関係をとらえた効果は求められない。その結果、支援がなくとも得られていたはずの生産高を、誤って支援の効果としても含めてしまうことになる。

次に、同時期にその産業が直面していたトレンドやマクロショックなど、支援の効果以外のものが支援の効果に含まれてしまうという点がある。だからこそ、同じトレンドを受けたけれども、支援を受けていなかった比較群というものが必要になる。

最後に、本当に効果があったかというのは、統計的有意性で判断されることになるのであって、生産高が大きく上がったように見えるというような話は、評価でも何でも無いことを再度強調させていただく。もちろんカウンターファクチュアルは実際に存在しないものであり、同様の概念を実証分析の手法で作り出す必要がある。つまり、理論的には支援の有無以外は全く同じほかの企業というものを持ってきて比較することになるが、その際、支援を受けることになった経緯、つまり企業の選定方法や、申請方式だったのかどうかという情報、さらには支援を受けなかったけれども非常に全体の属性が似ている企業を選ぶ際に、どれほど属性を制御できるのかなどの情報の共有が必要になる。(横山委員)

- 応募から競争的審査を通して支援を受ける企業が決まったのか、もしくは唯一無二でカウンターパートのような存在の企業がないようなところに一本釣りで支援をしたのかによって、推定が可能かどうかを含めた推定の状況が全く異なるので、それらは非常に重要な情報であり、その情報共有ができていない状態で今コメントしている。もし後者の一本釣りのような場合は、前述の比較対象というものを見つけることが困難になる。そのような支援を受ける企業決定の内生性が強過ぎるような場合は、様々な推定方法が使えなくなる。大きな金額を投じている分、その支援の評価は、特に重要であることも鑑みると、効果推定が可能な支援対象の選定方法を、今後、評価の観点も含めて事前に議論すべきであると思う。したがって、評価に当たり、対象企業の選定の仕方について、情報を共有いただくと幸いであ

る。(横山委員)

- KPIは非常に妥当なものになったが、一方でどうしてもデータのアベイラビリティで問題が生じてくると認識している。引き続き客観的な指標を設定できるよう、委員と協力して進めていただきたい。データをモニタリングするだけでなく、政策の因果的な効果を明らかにしていくことが重要。(中室主査)
- 防衛・GX・半導体は、強い経済の構築に向けて必要不可欠であり、長い期間にわたって民間からの投資を引き出し、着実に成果を上げていくということが重要。そのためにはEBPMのスキームを使って常に施策をバージョンアップしなければならない分野だと考える。(永濱主査)

(概要)

○岩田副大臣

委員の皆様方には、そしてまた各省庁の皆様におかれても、熱心な御議論をいただき、本当に厚く御礼を申し上げます。

経済・財政一体改革の課題は、社会保障、公教育、社会資本整備、地方行財政等多岐にわたり、いずれも国民生活にとっては重要なものである。強い経済の構築に向けては、この取組を強力に推進していく必要がある。

EBPMアクションプラン、そして改革実行プログラム、進捗管理・点検・評価表の改訂の議論も大詰めを迎えているところだが、各省庁におかれては、決定後もこれらの方針に沿って、国民生活の下支えや経済成長の基盤となる各分野の施策を迅速・着実に推進し、高い政策効果を生み出していきたい。

委員の皆様におかれては、引き続き、どうぞ御知見を賜りますようお願い申し上げます。

○議事(2)(3)(4)について事務局から説明を行った。

○委員等からの主な意見は次のとおり。

- 自県進学率の実績値は、東京都の学生が東京都の学校に進学した場合も含んだ数値だと聞いているが、もともと自県進学率を図る意図はそこには無いはずだ。客観的な指標の設定やその測定方法については2026年度までに検討することだが、それは自県進学率に関しても検討するのか。自県進学率を気にしなければならぬ地域にとっての自県進学率は意味がある指標だが、人口の多い地域の学生はおのずから自県に進学することが明らかなので、そのような数字まで含んで自県進学率を測るのは、ここでの意味をなさない。客観的な指標の設定の方法を検討いただきたい。(土居委員)
- 地域未来戦略の政策パッケージをまとめる際には、EBPMアクションプランなどの3文書を諮問会議決定するということを強く意識して、議論を進めていただきたい。KPI・KGIやロジックモデルを意識して政策パッケージをまとめていただきたい。(土居委員)
- 社会保障分野については、12月末の段階ではなかなかKPIを設定するのが難しい状況であることはよく承知しているが、来年の今頃まで何も議論しないということではなく、中間段階でも議論を進めた方が良い。(土居委員)
- 厚生労働省におかれては、社会保障に関するKPI・KGIについての途中段階でのたたき台を、来年上半期に経済・財政一体改革推進委員会またはワーキング・グループで示していただいて議論し、また厚生労働省に持ち帰り、来年の秋に臨むような形式で、途中段階で議論する機会を設けていただきたい。(土居委員)

- 近年、政策分野でDXが進展しているが、政策DXが進展すると、政策実施の過程でログとして大量のデータが生成・蓄積される。そのため、外生的なデータ蓄積の差に関わらず、政策を進めながら評価の材料となるデータを意識的に蓄積することで、政策を作り進めながら改善するプロセスが可能となり、EBPMやワイズスペンディングの理想形に近づける。(赤井委員)
- 必要なデータを主体的に作り・蓄積する基盤は整備が進んできている。医療分野においても、医療法改正により公的データベースの整備が進んでおり、まちづくりや地方自治との連携による効果発現が期待される。DXの結果として生成されるデータを待つだけでなく、政策評価や他分野の効果測定に活用できるよう、使い勝手を改善することが重要である。(赤井委員)
- 不動産IDやBIM、PLATEAUなど都市DXの取組により、個人のマイナンバーと同様、地点を一意的に特定する座標ができてくる。これを基盤としたデータを官民ともに蓄積することが、住みやすさや都市再生の評価、まちづくりの途中での軌道修正に資する。そうしたDXの結果として、政策の分野を越えた連携のためのデータの基が生まれる。文化・スポーツ政策も都市再生の重要な要素であり、これらを統合的に取り込むことで、効果的な都市再生に繋がる。縦割りの政策が段々とモジュール化し、連携しうる形になり始めているため、今後は、3つのワーキング・グループを極端に分離せず、省庁横断で連携を強化することで、結果を出しやすくなる。(赤井委員)
- EBPMを進める上では、政策の進捗管理にとどまらずに、どのような条件下で、どのような実施方法が効果を発揮するのかを明らかにする、実装科学の視点を今後強めていくことが不可欠。また、政策の実効性を高めるために、例えば同じ政策でも、当然自治体によって成果が違うという現実もあるため、エビデンスを現場にうまく適合させていくプロセスそのものを科学的に扱っていくことも同時に大切である。(古井委員)
- 文教の分野に関して、目標を数字で決めるのは難しいと思うが、客観的指標のKPIが増えていることは評価すべき。一方で、収容人数、定員割れ、自県進学率、大学院進学率等の指標は、KPIにすると、全国集計により個々の大学ごとの地域差が見えにくく、進んでいる地域の影響で「進捗が緩やかでも問題無い」という印象を与える恐れがある。喫緊の課題と時間的余裕のある項目を明確に分離し、改善策を整理することで資料の視認性が向上する。(小西委員)

- 社会保障分野に関して、KPI 第1階層は客観的指標だが、第2階層はアンケート結果になってしまっている場合があり、階層構造の妥当性が不明確である。KGIに近い指標を上位に整理し、客観的指標を増やすことが望ましい。(小西委員)
- 災害インフラの脆弱性を市町村レベルで可視化する取り組みは有意義だが、強靱化や修復、災害時対応の具体策が不明瞭な部分がある。(小西委員)
- 本委員会の意義は、日本全体で何が不足しているかを省庁横断的に把握する点にある。資料からは、インフラの技術者不足や半導体分野の人材不足など、日本の弱点が明らかになる。これらの資料は、将来必要な人材像や教育プログラム、産業構造を検討するための重要な材料だ。個別課題の解決に加え、俯瞰的視点で議論を進めることが重要である。(小西委員)
- 民間企業の雇用者の各役職段階に占める女性の割合が KPI 第2階層に入っているところに関して、その背景にあるメカニズムに関してコメントがある。もちろん長労働時間奨励傾向によって女性が管理職になりにくくなるというメカニズムもあると思うが、それは週労働時間 60 時間以上の雇用者の割合がもう入っているので、問題ないと思っている。
 一方で、ハラスメント防止の強化とともに起こりやすいのが、女性のほうに特に頼んでいない過度な配慮、つまりオーバーアコモデーションが働きやすくなり、その存在が高所得の女性の昇進を阻むことも先行研究で近年証明されている。このオーバーアコモデーションの概念を捕捉する方法は、先行研究によると、どのようなフィードバックを上司から受けたかという情報を利用することであり、慶應の家計パネルなどではそのような情報が利用可能。
 ある程度役職を持った人がプロジェクトなどで失敗した際に、女性のリーダーが失敗した場合は、運が悪かったただ、というような本質的ではないフィードバックを受ける傾向が強い一方で、男性のリーダーが失敗したときには、本質的な問題点を含めて叱責されるというようなフィードバックをもらう傾向が高いという先行研究がある。本質的なフィードバックを気遣いから避けられている女性がスキルを向上させる機会を失っているとも言えるし、企業側も、「本音で問題点を指摘できるため育てやすい」という気持ちを男性に対してより感じやすい面があって、その結果、同じ能力の男女がいれば、男性を管理職に選んでしまうというメカニズムが実際にある。ハラスメント防止の強化の下では、このコントラストが明確になると思われるので、オーバーアコモデーションのメカニズムという概念も、女性の管理職割合や男女賃金格差を決定づける注目すべき要因として今後考慮していく必要があるのではないか。(横山委員)
- 非正規割合が減れば良いというわけではない。例えば被用者保険適用拡大が進む中、保険料の存在によってコスト高となった短時間労働者や非正規が解雇され

て、不本意失業、不本意非労働力化が非正規であった人の中でどれほど起こっているかというのにも同時に見る必要がある。同様に、高齢者のフルタイムの指標などもあるが、非正規比率が前述の理由で減れば、フルタイム比率は高まる。フルタイムの指標に関わるもの全てに同じ問題があり、非正規比率が減ってフルタイムが高まればハッピーなことなのかどうかというところは、引き続き見ていかなければいけない。これに関しては以前リプライもいただいて、問題意識を持たれているものと理解している。(横山委員)

- 理想の子供数を持たない理由として「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」を挙げる夫婦の割合を評価する際に、必ずしもこの指標の低下が、金銭的な余裕が生まれたことを意味するわけではないということは以前も申し上げた。実証的な観点から、金銭的にそこにお金をかける余裕がなくなったことによって、育児の質に対する意識や関心が下がったりするなどの変化がおり、子供を産まない理由の一番大きな要因として、子育ての質に関わるようなことを挙げなくなったというメカニズムもあることに留意しなければならない。実証分析においては、その意識や、その意識の代理変数のようなものは必ずコントロール(制御)して、それは一定として推定することが非常に重要だと思う。(横山委員)
- 進捗管理・点検・評価表におけるアウトプットとアウトカムの因果関係について、実証研究に基づいた確信がある部分と、有識者の意見や理屈のみで記載している部分が恐らく混在している。
エビデンスが無いからやってはならないという訳ではないが、一方で、進行後にアウトプットがアウトカムの改善に繋がっていない施策や、出生数減少のように理論通り進めても最終的な目標に届いていない施策があるはずだ。改めて来年度早期に、他国の先行研究でより効果的な少子化対策が無いかを改めてレビューすべきだ。これは他の分野にも共通することだと思う。(西内委員)
- 社会保障については医療法を改正したタイミングであるためインプットが間に合っていないとのことだが、これまで医療費の適正化を目標としているものの増加傾向が続いているし、医師偏在は2010年代よりも深刻化している。都会の開業医は比較的経営に余裕がある一方、救急医療は人手不足が深刻で、ある程度人口の多い地域でも機能不全に陥っており、制度設計の不備が明白である。(西内委員)
- 来年度以降の社会保障分野における疾病に着目した対策に関しては、NDBなどを活用した優先分野の再検討が必要であると考え。現在は、糖尿病の重症化予防が重視されているが、我々が行った今後の医療費予測の研究では、例えば骨折が重要になることが明らかになっている。若年女性における将来の骨折リスクの増大、運動量の減少、痩せの増加、ビタミンDの不足などを踏まえると、予測

以上に骨折は重要な課題になるのではないかと思う。また、骨折はアジア全体でも課題となるため、現行の円高環境下で将来も安定的にインプラントが海外メーカーから調達できるかも不安だ。産業政策として医療材料、医薬品の国内生産力を高めるといった目標にも繋がっていくと思う。このように、NDBを分析することで今後の医療政策の優先課題が明らかになってくるので、この面での政策の精緻化が行われると良い。(松田委員)

- 東北地方の学生は、経済的な要因で東京の大学への進学が困難であり、大学全体の自県進学率は上がっているものの、東北大学で見ると東北地方からの進学率がかなり下がっており、相当な危機感を覚えているという話を聞く。自県進学率や地方内進学率だけでなく、その地域のトップ層の学生の進学率も考慮しなければならぬ。(永濱会長代理)
- 本委員会の取組は、国民生活の下支えや経済成長に資する政策を、スピード感を持って前進させるとともに、高い政策効果を生み出していくための重要な取組である。特に責任ある積極財政という中で重要なのは、政策そのものを実効性があるかということを確認することであり、その意味では、実効性のあるEBPMが必要だ。実効性のあるEBPMを実行するために、EBPM自身のEBPMが必要なのではないか。(若田部会長)

(以上)